

沖縄県医療ソーシャルワーカー協会

MSWニュース 4月号

2019年4月1日発行

事務局：大浜第一病院
〒902-8571 那覇市天久 1000 番地

TEL (098) 866 - 5171

FAX (098) 864 - 1874

E-mail t-matayosi@ns.omotokai.jp

編集：鶴渕 太郎
(沖縄協同病院)

研修参加報告

第7回沖縄県ソーシャルワーク学会 & 社会福祉公開セミナー

平成31年2月23日

ちばなクリニック 医療相談室 宮城 幸之佑

2月23日(土)に沖縄国際大学で、第7回沖縄県ソーシャルワーク学会 & 社会福祉公開セミナーが開催されました。

午前中は分科会で、沖縄県内で活躍するソーシャルワーカーの皆さん(4団体より、各3演題の計12演題)に、日頃の研究や実践の成果を発表して頂きました。初めての試みでしたが、離島からWEB(遠隔操作)を使った発表もありました。きっと良い刺激になり、沖縄県のソーシャルワークの資質向上に繋がったと思います。

午後は基調講演として、沖縄国際大学 総合文化学部 人間福祉学科教授 安良徳昌先生に、全体のテーマである「沖縄のソーシャルワーク過去・未来・現在(いま)」に沿って講演頂きました。また特別企画トークセッションでは、各団体の会長さんに登壇頂き、これまでの経験を振り返りながら、今後沖縄に求め

CONTENTS

- 研修報告(県第7回沖縄県ソーシャルワーク学会 & 社会福祉公開セミナー).....1
- 研修報告(回復期リハビリテーション病棟協会 第33回研究大会).....2
- 研修報告(H30年度沖縄県入退院支援デザイン事業に係る研修会).....3
- 研修報告(第4回沖縄県慢性医療協会MSW部会研修).....4
- 研修報告(入退院支援事業に係る研修).....8
- 研修報告(沖縄から社会福祉/ソーシャルワークを考える).....9
- 在宅医療・介護連携(那覇圏域)報告.....10
- 自主勉強会報告(めだかの学校).....10
- 自主勉強会報告(めだかのホームルーム).....11
- 新入会員紹介.....12
- 研修部だより.....12
- 理事会議事録.....13

るソーシャルワーク、ソーシャルワーカーが持つべきビジョンについて語って頂きました。

私達が、ソーシャルワーカーとしてソーシャルワークが出来る環境も、先輩方がソーシャルワークの価値を大切に創り上げてきた過程があることを認識することができ、先輩方に近づけるよう努めなければならないと感じました。また県外では、各団体が一緒になって学会などを開催することは少ないと聞きました。これも沖縄の良さだと感じました。

今回参加者は、午前・午後合わせて 100 名近くありました。樋口会長をはじめ、分科会で発表した崎濱さん、前濱さん、比嘉さん、実行委員メンバー、携わった皆さんお疲れ様でした。

研修参加報告

回復期リハビリテーション病棟協会 第 33 回研究大会 in 舞浜・千葉

平成 31 年 2 月 21 日～22 日

大浜第二病院 医療福祉課 謝敷 奈津子

H31 年 2 月 21 日～2 月 22 日の 2 日間、回復期リハビリテーション病棟協会主催の「第 33 回研究大会 in 舞浜・千葉」へ参加しました。全国各地の回復期病棟に勤める各専門職が、それぞれの視点で現在の課題や実践報告・リハビリ最先端技術の取り組み等を研究し、4 施設・14 会場に渡り、約 1,000 題を超える発表が行われました。

演題の中では、リハビリロボット ReoGo-J や高頻度反復経頭蓋磁気刺激 (HF-rTMS) を使用した片麻痺患者の機能改善の研究発表や、患者の内観的思考が機能改善に影響をもたらす事を研究した演題などを聴講しました。ランチョンセミナーでは、脳卒中センター医師の片山正輝氏より、「脳外科術後の抗血小板・抗凝固剤の適応と現状」をテーマに、実際にオペ映像を見ながら、術式の紹介や抗血小板薬・抗凝固剤の使い分けの講演を聴講しました。今まで何となく、どちらも同じ「血液サラサラの薬」と思っていたのですが、血栓や発症部位により使い分けがされていると分かり、改めて学ぶきっかけとなりました。また MSW 部門にて上智大学准教授の高山恵理子氏より、自己評価の重要性、自身の支援を「見える化」する事で目標・プロセス・実践が具体化され、SW 自身の質の向上や、他職種へ SW の役割を明言化する事にも繋がる、非常に重要な物である事を改めて学ぶ事ができました。

2 日目には厚生労働省保険局医療課の吉川裕貴氏より、回りハ病棟の現状やアウトカム導入にあたり「量より質、効率性」がより一層求められている事、その反面、病院ごとに「患者選び」が生じてくる可能背が高まり、廃用や脊損患者の行く先が狭められてしまう可能性を危惧しており、今後の課題になってくる事などを講演されていました。また、MSW 企画で就労支援を中心にベテラン SW の方々の事例を聞く事もできました。事例では私が今まで出会った事のないケースを模擬体験出来たり、アセスメント力や寄り添いの大切さを再確認できる為、事例を通してフィードバックし共有する事の重要性を学べた研修でした。

2 日間を通して全国各地の病院の、独自の研究や取り組みを聴講する事が出来、とても参考に

なった事、引いてはここに参加した方々はすべて、「患者の利益のため」に活動を続けているのだと共通認識できる場でもありました。この学びを自院へ持ち帰り、日々の SW 業務の糧として勤めていきたいと感じました。

研修参加報告

H30 年度沖縄県入退院支援デザイン事業に係る研修会 ＜専門研修：退院における実践の自己評価＞

平成 31 年 3 月 2 日～3 日

小禄病院 地域医療部 眞榮城 怜未

3 月 2 日、3 日の二日間、沖縄県総合福祉センターで行われました入退院支援連携デザインに係る研修に参加させていただきました。

1 日目は、WITH 医療福祉実践研究所の佐原まち子先生による「退院支援業務の概観」と題した講義、演習がありました。MSW の入退院支援がたどってきた歴史や医療政策の流れ、チーム医療で取り組む退院支援、MSW の役割について講演いただきました。私が 1 日目の中で印象に残っていることは、入退院支援において、ジェノグラム、エコマップといったツールを使った面接方法です。これまで私は、アセスメントの際に簡単なジェノグラムを作成することはありましたが、それらのツールを使って実践することはありませんでした。小原先生からご教授いただいたツールを使うことで、その人(患者様)を取り巻く環境やニーズを浮き彫りにし、またカンファレンス等では A4 紙一枚で情報がつかめる便利性もあり、ぜひ現場で活用させていただきたいと思いました。(と、実は早速初回面談で実践をしたのですが、整理するのに簡潔でわかりやすく、よかったです！少しずつ上手に活用できたらと思いました。)

2 日目は、日本社会事業大学の小原眞知子先生による「平成 30 年度入退院支援連携デザインに係る研修」と題した講義、演習がありました。退院支援に影響している社会情勢を理解し、所属機関の状況を把握、評価することで私たち MSW の存在意義を再認識することができました。また、グループディスカッションでは、退院支援において専門職者は何を期待されているか？ ということについてアウトカム評価とプロセス評価に分けて説明していただき、支援において何を指して何を行うかということについて可視化することの重要性について理解することが出来ました。

ソーシャルワーカーとして医療分野で働くようになって一年に満たない私ですが、改めて、求められる入退院支援を理解することができ、患者様が地域で安心・安全に生活できるように支援していきたいと思いました。

研修参加報告

平成30年度第4回沖縄県慢性医療協会MSW部会研修 喪失と悲嘆の道を共に歩くセンシティビティー・トレーニング

(感受性の訓練)

平成31年3月7日

屋宜原病院 医療相談室 宮城 忠

H31年3月7日(木)北中城村あやかりの杜で、神奈川県立保健福祉大学准教授の川村隆彦氏をお招きし、県慢性期医療協会 SW 部会の研修が行われました。参加者は13名。3つのグループに分かれ、危機にあった人が、「悲嘆の旅路」を10のフェーズ(局面)を通して、立ち直る段階を学びました。

1. 喪失を十分に悲しむ

段ボールで作った打楽器等で、リズムを刻み、声を出す。

2. 「命の水」をカラの心に満たす

喪失を十分に悲しむ事で、各自の心の中に「命の水」が注がれたことを感じる。

3. 水を守りながら、歩き続けるための「エンパワメント8つの原則」

「命の水」に例えたグラスにギリギリまで水を注ぎ、それを「エンパワメント8つの原則」を象徴する紙皿に乗せ、グループで協力して、肯定的な言葉を発しながら、目的地へ運ぶ。

※「エンパワメント8つの原則」とは、「信頼⇔責任(役割)、協働⇔仲間意識、肯定的な言葉⇔肯定的なイメージ、目的⇔達成感」のことである。

4. 共感しあえる力を高める

悲嘆している人が、その気持ちを理解してくれているグループのみなさんの腕の中に、後ろ向きで倒れる。(共感を受け入れてもらうことで癒やしに近づく)

→「私の気持ちが分かりますか?」「分かります。だから、私達のもとへ来てください。それができますか?」「できます!」「できましたね。私たちには、あなたが必要なんです。」と、言葉のやり取りあり。

5. 相互支援のコミュニティを築く

グループで段ボールのタワーを築く。

6. 怒りの感情をコントロールする

丸めた新聞紙(感情のボール)を他のグループのタワーへ投げつける事により、自分自身の怒りの感情を知る。

7. 自分のありのままを愛し、受け入れる

感情的な攻撃は、いつかは終わる。壊れたタワーを修復し、他のグループのタワーへ橋を架ける。その後皆で「you are so Beautiful to me.」の歌に合わせて、ジェスチャーを交えて、愛を伝え、受け入れる。

8. 旅で得たものを、苦しむ他の人々に受け継ぐ

「悲嘆の道」を歩み、経験で得たものを、今、苦しんでいる他の人々に手渡しする意味で、皆でバトンを回し合う。

9. 支えられながら、新しい夢、希望を求める

ようやくトンネルの外へ出た。新しい道が見えている。一緒に「IF WE HOLD ON TOGETHER(力を

合わせて困難に立ち向かえば)」を歌う。

10. 旅で経験したことを物語として語る

経験したすべての活動の意味をグループで振り返る。

川村氏によると、このような経験学習は、体感的に理解することにより、記憶が脳に刻まれ、考え、大切な気づき(原則)へ繋げていけるとの事でした。研修後ノートを見なくても「エンパワメントの8つの原則」を自然なかたちで患者様に応用出来た時、研修の効果を感じました。最後に皆で歌った歌のフレーズ(力を合わせて困難に立ち向かえば夢はきっと生き続ける)を、気が付くと口ずさんでいました。

*以下、研修で活用した歌(英語と日本語)と、川村先生の参考資料です。

If we hold on together

Don't lose your way With each passing day You've come so far Don't throw
it away

Live believing Dreams are for weaving Wonders are waiting to start
Live your story Faith, hope & glory Hold to the truth in your heart

If we hold on together I know our dreams will never die
Dreams see us through to forever Where clouds roll by For you and I

Souls in the wind Must learn how to bend Seek out a star Hold on to the
end

Valley, mountain There is a fountain Washes our tears all away
Words are swaying Someone is praying Please let us come home to stay

If we hold on together I know our dreams will never die
Dreams see us through to forever Where clouds roll by For you and I

When we are out there in the dark We'll dream about the sun
In the dark we'll feel the light Warm our hearts, everyone

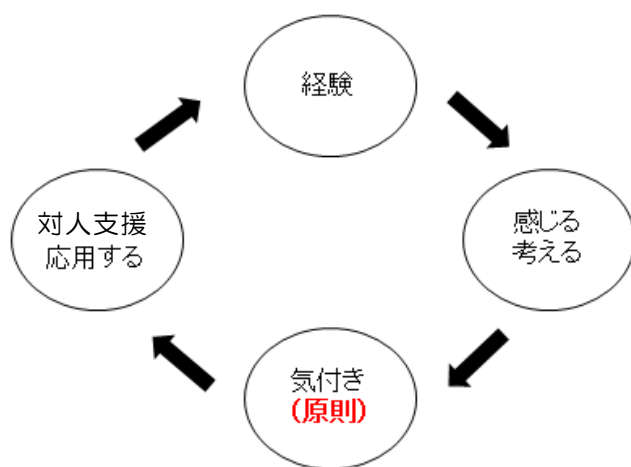
If we hold on together I know our dreams will never die
Dreams see us through to forever As high as souls can fly
The clouds roll by For you and I

日々の移ろいに 心くじけそうになっても どうか自分を見失わないで
 遥かな道をここまで生きてきたのだから 決してあきらめないで
 信じて生きていれば夢はきっと叶えられる 素晴らしい未来がきっと待っている
 思いのままに生きて 信頼、希望、栄光 あなたの 信ずるものをどうか 見失わないで
 ※力を合わせて困難に立ち向かえば 夢はきっと生き続ける
 全てを越えていつか永遠の高みへといざなってくれる
 そこではきっと輝く白い雲が遥かにたなびいている 私たちのために

人の心も吹き渡る風も 時には行く手をさえぎられ折れることを学ぶでしょう
 それでも信ずる星を目ざして 最後まであきらめないで
 人生には山もあれば谷もあるいつか救いの泉が流した涙をすべてそそいでくれる
 言葉はあまりに もろいけれど 人は敬虔な祈りを捧げる 安息の地を求めて
 たとえ 闇に閉ざされても 私たちは輝く太陽を想うことができる
 漆黒の暗闇の中であってさえ 心を暖かく照らす陽の光を感じられる
 それは全ての人に等しく与えられた恵み

心を合わせて困難に立ち向かえば 決して絶えることのない夢が
 遥かな永遠へといざなってくれる それは魂が到達しうる最高の高み
 輝く雲の波が果てしなく広がり私たちを迎えてくれる

自分本来の力を取戻し、人々とのつながりを強める原則 <経験学習のサイクル>



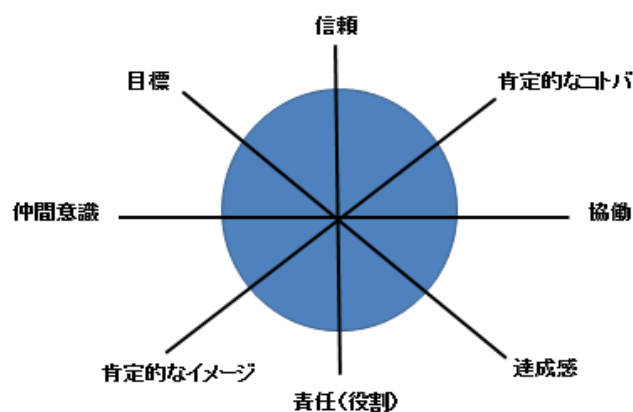
私たちは、何か経験（体験）をすると、感じ、考え、大切な気づき（原則）へとつながります。この原則を対人支援に応用するならば、新しい経験を得るでしょう。経験学習のサイクルを理解すると、日々の小さな経験から感じ、考え、大切な原則を知り、それを困難な状況や課題に応用することができます。前に、大学で、

新ゼミ生たちと一緒にお化け屋敷に行ったことがあります。中に入ると 1本の細いロープを渡されました。私たちはそのロープを握り締め、悲鳴を

あげながら奮闘しました。お化け屋敷を出たとき、私たちは、入る前の数倍も仲良しになりました。この経験から私は、たとえ短い時間であっても、共通の経験が人々を友達にするという原則を学びました

<エンパワメントの原則>

誰でも試練に遭遇すると生きる力を失う一パワーレスな状態になります。そこから抜け出すには、本来の力を取り戻す（エンパワメントする）必要があります。エンパワメント理論に共通するエッセンスをまとめると右の8つの原則となります。この原則は経験学習を通して体感的に理解する時、記憶が脳に刻まれ、「できない」と思っていたことが「できる」と感じられます。



【信頼—責任・役割】自分と他者を信頼する力は私たちの中に眠っています。チャレンジに答え、リスクを越えて行動する時、信頼の力が自身の中にあることを確信できます。信頼に答えようとする時使うのが責任という力です。これは役割とも呼べます。何の役割もなければ、「あなたは必要ない」と同じです。人を強めたいなら、その人を必要とすることが原則です。【仲間意識—協働】仲間とは友達です。私たちは、ただ時間を過ごすだけでは友達にはなれません。一緒に何かをする経験により、友達になれるのです。【目標—達成感】たとえ小さな目標でも達成感を生み出すことができます。達成感は私たちの自己肯定感を高めてくれます。【肯定的なコトバ—イメージ】肯定的な言葉や態度は人の心を広げ、経験を肯定的なイメージとして、脳に刻むのを助けます。脳にあるイメージは、私たちの最大の味方あるいは敵になります。肯定的なイメージを刻むことができれば、幸福度が増すでしょう。否定的なイメージを肯定的に変えるには、新しい体験を意味付け直すことです。それは経験学習によって可能です。小学生の頃、逆上がりが苦手だった女の子が、一緒に練習してくれた先生の助けがあり、初めて逆上がりができました。その時、先生は、「すごい！頑張ったな。覚えておくんだよ、今日、あなたは、世界で一番素晴らしいことを達成したんだよ」と声をかけました。この女性は、今でも、鉄棒を見るたびに、その時の素晴らしい気持ちを思い出すそうです。

研修参加報告

入退院支援連携デザインに係る研修

〈第 2 回多職種研修：地域住民への普及啓発～ACP について〉

平成 31 年 3 月 9 日

ハートライフ病院 医療福祉相談室患者総合支援センター 佐平 彩乃

平成 31 年 3 月 9 日、入退院支援連携デザインにおける研修に参加しました。

講演の一つ目は、福岡県大牟田市の白川病院で医療連携室長をされている猿渡進平先生による、認知症高齢者の“家に帰りたい”を支える取り組みについての講義です。私が興味深かったものは、認知症SOSネットワーク模擬訓練で、徘徊役が住宅地を歩き、住民に場所を尋ねた反応を調査するという取り組みです。模擬訓練の結果、住民の希薄化という課題が発覚し、その原因として、認知症の方の生活が見えず関わり方が分からない、という声があがりました。その後、NPO でサロンを立ち上げ、ネットワークの拠点を作り続けることで、模擬訓練の規模も大きくなり、始めは徘徊役 1 名に参加者 9 人に対し、最大で徘徊役 50 名に参加者 232 人、声掛けの件数も 1 件から 492 件に増えたそうです。独居の高齢者が増えている中、福祉関係者が立ち上がり、企業や町の商店、学校も巻き込むことで、地域に一体感が生まれ、その連結がさらに良い街づくりへ展開するのだと感じました。

二つ目の講演は、群馬県原町赤十字病院副院長で、NPO 法人あがつま医療アカデミー理事長を務められている内田信之先生による講義で、地域の老人クラブと医療者で考えるエンド・オブ・ライフケア「私の意思表示帳」の共同制作と普及啓発活動についてでした。胃ろう増設時、約 9 割の方が認知症等の理由で意思疎通能力が困難で、その方の意思決定は誰が行うのか、という問題がきっかけだったそうです。医療者が ACP に対して取り組むべきこととして、本人の意思を表出できる体制を整え共有理解し、考えの変化に応じて共に悩み繰り返し話し合いを持つことだと学習しました。

最後に、ACP の啓発活動は、自分を振り返るきっかけを与えるもの、という言葉が印象的でした。一人の人生にマニュアルはなく、悩み選択する権利があり、考えるためのツールとして日常的に身近になるべきだと感じました。

研修に参加し、他県の地域で取り組んでいる事例に触れ、私たちの地域に活かせるものを吸収し、地域を含めたチーム医療として考えることの重要性を学ぶことができました。

研修参加報告

沖縄から社会福祉/ソーシャルワークを考える

平成 31 年 3 月 9 日

大浜第二病院 医療相談室 安慶名 真樹

H31年3月9日に、沖縄国際大学で「沖縄から社会福祉/ソーシャルワークを考える」と題し、保良昌徳教授の退官に伴う最終講義とトークセッションが行われました。

第1部の講義の中では、沖縄の歴史を振り返りながら沖縄の社会福祉がどうい社会状況の中行われてきたのか、お話がありました。その中で印象的だったのが、社会福祉という言葉は現日本国憲法策定にあたって「社会の福祉」として表現され使用されるようになり「社会福祉は制度・政策として使われる言葉であり、ソーシャルワークとは別の定義である。ソーシャルワーカーは制度政策に合致する事象だけが対象ではないため、ソーシャルワーク=社会福祉という概念は正しくなく、『ソーシャルワーカーは社会福祉の専門職である』という表現も正しいとは言えない」という点でした。「歴史を知らずにソーシャルワークは理解できない」と話されていた点は、今まで数々の研修や講義の中でもたびたび意識する機会があったので、改めて興味深く聞き入ってしまいました。

第2部では「グローバルスタンダードに基づくSW実践へ～沖縄からの発信～」と題し、「生活困窮者支援の権利擁護の視点から」運転都子氏(生活支援パーソナルサポートセンター)、「性的マイノリティーの権利擁護の視点から」加藤慶氏(沖縄大学)、「若年女性の権利擁護の視点から」新垣梨沙氏(琉球新報)の3者を交え、コメンテーターに保良昌徳氏、コーディネーターに日本ソーシャルワーカー協会の高石豪氏でまとめたトークセッションがありました。それぞれの実践の中から支援者として、現状や課題に感じる事の報告がありました。特に印象的だったのが、琉球新報の新垣氏の報告で、10代で風俗に身を置く若年女性達の取材の内容でした。彼女たちの置かれている現実や、そうせざるを得ない環境、そこに行きつくまでに支援の手が伸びない現状があった事実。聞いていてとても考えさせられる内容でした。細かく報告できないのが残念ですが、新聞記者の新垣氏がまさにソーシャルワークを行っている事実を目の当たりにし、このトークセッションに参加していたソーシャルワーカーたちは、権利侵害、差別に対して自分自身は何をする人なのか、ソーシャルワークの専門家とはどういう人を指すのか、あらためて考えさせられる機会となりました。

保良昌徳氏の最終講義という名の集まりでしたが、保良氏にはまだまだ沖縄のソーシャルワーク実践者として活躍を期待し、ともに取り組んで行こうと会場の士気が上がった会となりました。

在宅医療・介護連携(那覇圏域)報告

地域包括ケアシステム構築に向けた行政との協働

那覇市立病院 総合相談センター 伊禮 智則

地域包括ケアシステムが提唱され、医療現場では入退院支援システム構築が加速されている。その中でも、退院が進まない要因の一つに介護保険の申請から認定までの期間が長いという意見もある。平成 29 年度 MSW 協会で会員及び、那覇中心の精神科病院へ実施したアンケート調査でも、「介護保険の申請を受け付けてもらえない。」「認定結果がでるまで時間がかかりすぎる。」「介護認定受けられないため退院ができない。」などの声があがった。そこで、平成 29 年 3 月 27 日にちゃーがんじゅう課との意見交換会を実施し、平成 30 年より、ちゃーがんじゅう課と MSW 協会で、地域包括ケアシステム構築に資する協働を目的に 1~2 ヶ月に 1 回のペースでお互いの困り事や課題について話し合いを行っている。MSW が困っているように、ちゃーがんじゅう課でも受付や調査をする際、「本当に適切な申請タイミングなのか。」「窓口に来ている方は理解していないが大丈夫なのだろうか。」「調査ができる状態なのか。」など困っている状況があることもわかった。また、病院の機能や仕組みが複雑で、申請意図が共有できていない状況もあり、ミニレクチャーなどで理解を深めた。お互いに目的は、地域住民、クライアントが安心して地域で生活できるように制度を活用してもらうことで一致している。支援過程が見え、協働できることが大切である。そこでお互いの困り事を共有しながらスムーズに申請ができるように共通の「連絡票」を活用する仕組みを構築していくことになった。連絡票を活用するにあたり、記入する手間等 MSW の業務負担も懸念されたため、平成 30 年 11 月に那覇市近郊 4 病院で試験的に活用しています。結果は、記入の負担感より、問い合わせが減って申請がスムーズになったという意見が多く効果的でありました。そこで、平成 31 年度は那覇市圏域医療機関を中心に、連絡票活用が可能であることを広報していく予定である。あくまでも目的は地域住民、クライアントが安心して地域で生活できるように制度を活用してもらうことであること、地域包括ケアシステムに資する活動であることを意識しながら今後も活動を展開していきたい。

自主勉強会報告

めだかの学校

大浜第一病院 地域医療連携センター医療福祉課 與座千夏

3 月 13 日(水)ハートライフ病院にて大浜第二病院の安慶名真樹氏を講師としてめだかの学校が開催され、事例まとめ方について勉強しました。

どのような事例を選んだらよいか分からず、複雑で難渋したケースでないといけないといった勝

手なイメージがありましたが、無事退院できたけれどもなんだかもやもやしているという、うまく言えない引っかかりを大事にし、事例として提出した方がいいのだと知り、そうすることで何にもやもやしていたのかといった自己覚知することが出来ると学びました。

事例検討の効果について、自分自身の振り返りを行うことが出来るだけでなく、聞いている方も模擬体験することが出来たり、精神面の安定させることが出来たりと数多くのメリットがあることを知りました。また、事例検討というのは『もっとこうの方が良かった』というものではなく、『こういった方法もある』と別の視点をもたらうことで一つ一つのケースに合わせたより良い支援につながるのだと気づくことが出来ました。

実際の事例を見せていただく事もでき、事例検討は枠組みに沿った情報を全て集めればよいというわけではなく、読み手にクライアントの人物像が伝わるために必要な情報を選び集めることが大事だと感じました。今年度のめだかの学校は事例検討も行っていくため、今回学んだ知識を活かした事例で自分自身のスキルアップにもつなげていきたいです。

めだかのホームルーム

沖縄赤十字病院 地域医療連携室 仲村 千晶

3月6日(水)に行われためだかのホームルームについてご報告致します。

めだかのホームルームは経験年数4年以上のMSWを対象とした自主勉強会です。

毎回PCのテレビ電話(?)で公立久米島病院とつなぎ(久米島にいても参加できます笑)、内容は事例検討と日々の業務で感じることなどを語り合い、励まし合い(笑)毎回話題は尽きないです。

今回は大浜第一病院の當銘さんが「当院新人教育プログラムを実施して」という題で発表しました。内容としては大浜第一病院で実践している新人MSWへの愛情がたくさんつまった教育プログラムで、今からでもそのプログラムを受けたい！と声がるほどでした。そのあと次年度計画をたてました。

次年度開催日程と開催場所が下記の通りです。時間は毎回19時開始を予定しています。

5月8日 沖縄赤十字病院

7月10日 沖縄協同病院

9月15日・16日 久米島病院(宿泊研修予定)

11月6日 嶺井第一病院

1月15日 沖縄協同病院

3月4日 嶺井第一病院

自主勉強会なので自由参加です！ぜひ皆さん業務終了後、一緒に語り合いませんか？

予定変更などもあるので、問い合わせは各開催医療機関へお問い合わせ下さい。

* 3月、めだかの放課後、OGSVの辞すY勉強会は開催がありませんでした。

新入会員紹介

宜野湾記念病院 相談室 西原 裕希

初めまして、今年度より宜野湾記念病院に入職しました西原裕希と申します。入職して早一年が経とうとしており、本当にあつという間だったと驚いています。慣れないことも多く、病棟スタッフや相談室の仲間、同期の方たちに支えられた一年だったと思います。

日々の業務では一般病床、包括、回復期とあるなかで、現在一般病床を担当しており、病院内外の方たちと連携をとらせて頂いています。毎日が学びの連続で、反省も多々ありますが、患者さまやご家族の人生の一部に携われることに、身の引き締まる様な思っています。少しでもより良い支援ができるよう、今後も日々の業務だけではなく、めだかの学校や研修などを通して精進していけたらと思います。これからもよろしくお願ひいたします。

研修部だより

めだかの学校(おおむね経験年数3年未満)

テーマ	次年度の活動計画
日時	2019年4月17日(水) 19:00
会場	ハートライフ病院
参加費	無料
問い合わせ	大浜第二病院 医療福祉課 謝敷

定期総会・全体研修

テーマ	※研修内容については決まり次第お知らせします
日時	2019年5月22日(水) 13:30受付 14:00開始
会場	ハートライフ病院
参加費	無料
問い合わせ	

平成 31 年 3 月 理事会議事録

開催日時	2019(平成 31)年 3 月 19 日(火) 18:30-21:00
場 所	県総合福祉センター
出席者	樋口会長(司会)、新垣副会長、當銘事務局長、大城、望月、安慶名、伊禮、香村、長、石郷岡(書記)
欠席者	又吉副会長、秦、奥平、仲地、山城

1. 各部報告

[研修部]香村理事

1)平成 30 年度 事業報告

→今年度の総括

2)第2回九州医療ソーシャルワーカー協議会 研修部会報告

→MSW ラダー作成への取り組み

3)2019 年度 研修部活動計画 検討会報告

→担当理事、部員の候補者について

→総会と抱き合わせの研修について 候補日 5 月 22 日(水)

→初任者研修(計 4 回) オリエンテーションは 5 月 25 日(土)

→中堅者研修 ISTT(3 回シリーズの最終年)

→全体研修 初任者から上級者までの全体研修を企画

4)自主学習

・めだかの学校 今後の事例検討会のあり方を検討

[広報部]安慶名理事

1)平成 30 年度 事業報告

→今年度の総括

→次年度の担当理事、部員の候補者について

MSW ニュース編集担当者の確保が難しい。

2)MSW ニュース編集規定の変更 →承認

2. 沖縄県ソーシャルワーカー協議会(4 団体)報告 樋口会長

→次年度の学会は社会福祉士会が担当。

→ハンセン病学会 当県開催 5 月 29 日~6 月 2 日 学会長との懇談予定(6 月)

[事務局]

退会者 3 名

3. 入退院支援連携デザイン事業

1) 研修報告

2) 次年度の事業計画

介護職を対象とした研修はどうか。

職能団体が抱えている課題、地域性などをヒアリングする必要がある。

3) 各団体の事業との共通点や相違点(特徴)は何か？

4) 医師会に事業委託していない市町村の実態調査も必要。

4. 次年度の理事体制

5. その他

1) ケアマネ協会より講師派遣依頼 →内諾した。講師 1~2 名を調整する。

2019 年 5 月 18 日(土) 対象:主任介護支援専門員

2) 九州医療ソーシャルワーカー協会研修会 熊本大会 2019 年 11 月 22 日~24 日

次回理事会 4 月 15 日(月)19:00~ 司会:新垣、書記:安慶名、連絡:伊禮

☆編集後記☆彡

(^o^)/ m(_)m m(_)m (´艸`) (o´艸`)(° ▽)(´ε`);(o´´へ´。)(*ㄨㄨㄨ)(O`ε`O)
(" ▽ ") (≥ ω ≤)(≥ ω ≤)(´O`)m()mm()m \ (^) / \ (^) / \ (^) /



沖縄県医療ソーシャルワーカー協会 ホームページ

<http://www.msw-oaswhs.jp/>

